

する効果について検討した。

【方法】レジメンは、5FU 500 mg day 1～5(cont), LV 20 mg day 1～5 (PM6), MMC 2 mg day 5 (AM9), CDDP60～80 mg day 5 (PM5)である。5FU は24時間持続で5日間投与するが、腫瘍の増殖が盛んな夜間に投与量を増加する。LV は5FUの効果を増強させるため夜間に投与する。5日目にCDDPの不活性を防ぐためMMCを先行投与した後、CDDPを夜間に投与する。CDDPを高濃度投与する場合、5FU先行投与にのみ相乗効果が得られるとされる。この場合5FUはCDDPのmodulatorとして作用する。また、CDDPを夜間投与することにより生体の腎毒性、消化器毒性が軽減できる。1クール4週で、点滴静注または肝動注で施行した。

【結果】3クール以上投与した進行再発乳癌5例の奏効率はCR1, PR2の60%で、grade3以上の副作用は食欲不振5%, 悪心嘔吐5%, 白血球数減少5%で極めて軽微であった。

【まとめ】生体の日周リズム (Circadian rhythm)を考慮したFLMP療法は副作用が少なく、有効性が期待できる治療法である。

15) 乳房温存療法の放射線治療

植松 孝悦・齋藤 眞理
石川 浩志・椎名 眞 (新潟県立がんセンター放射線科)
清水 克英・小林 晋一
佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)
本間 慶一 (同 病理)

【目的】乳房温存術後の放射線治療成績と副作用について検討する。【対象と方法】1993年4月から1997年8月までに当院で乳房温存術が施行され、温存乳房に放射線治療が施行された138症例139乳房。平均年齢は49.6歳(28-75歳)。病理学的病期I期110例、II期21例、III期1例、分類不能7例。放射線治療は温存乳房全体に6MVX線を用いて、1回2Gy、週5回、計46-50Gyの対向二門接線照射を施行した。切除断端陽性症例には計10Gyの追加照射を電子線にて腫瘍床に施行した。【結果】観察期間の中央値20.5か月(8.1-61.1か月)で、温存乳房内再発は1例(0.7%:1/139)であった。副作用は症状を伴う放射線肺炎を1例(0.7%:1/139)認めた。5年累積生存率、健存率は各々96.8%, 94.9%であった。

16) 食道癌術後化学放射線療法の初期経験

末山 博男 (新潟県立中央病院 放射線科)
穂苅 市郎・豊田 精一 (新潟労災病院 外科)
相馬 剛
長谷川正樹 (新潟県立中央病院 外科)

1997年3月より食道癌術後の局所制御の改善を目的として、食道癌術後症例に対して放射線と化学療法の同時併用を行った。放射線治療は通常分割で、総線量45-55Gy(5-6週)投与した。化学療法は5-FUの少量持続静注(250mg/m²)とCDDP(3mg/m²)少量連日静注である。これまでの対象症例は6例であり、照射理由はさまざまであった。放射線は全例完遂できたが、化学療法は2例が白血球減少のため中止となった。副作用は白血球減少と置換した胃管の胃炎が容量制限となった。観察期間が短いため全例無病生存しているが、今後さらに副作用の少ないregimenを検討する必要がある。

17) 80歳以上の高齢者食道癌に対する放射線治療成績

石川 浩志・植松 孝悦 (新潟県立がんセンター)
齋藤 眞理・椎名 眞 (ター新新潟病院)
清水 克英・小林 晋一 (放射線科)

目的: 当院で放射線治療を行った80歳以上の高齢食道癌患者の予後と問題点を検討する。対象: 1985年-1997年の間に当院で放射線治療を行った80歳以上の食道癌患者は40例であり、病理学的に扁平上皮癌と診断されたのは37例であった。このうちUICC病期分類(1987年版)のI-III期および遠隔転移が頸部リンパ節に限られるIV期の症例のうち、根治照射を目的に放射線治療を開始した34例を対象とした。方法: 線量別、病期別、一次効果別に生存率を検討した。結果: 線量別では、50%生存期間は総線量60Gy以上で13ヵ月、60Gy未満で3ヵ月であり、60Gy以上で有意に良好であった。病期別ではI期が有意に良好であった。一次効果別では有意差は認められなかった。60Gy未満では、合併症で全身状態が悪化し、照射を中止している症例が多く認められた。考察: 80歳以上の食道癌患者の放射線治療では、合併症に十分注意し、60Gy以上の照射を行うことが重要である。